令和３年度

印旛地区教育研究集会外国語研究部　提案資料

研究主題

「指導と評価の一体化を目指した授業の工夫」

～自分自身を振り返り主体的に学習する態度を養う～

富里市立富里中学校

萩原　正勝　　萩原　景子　　寺内　暖賀
小林　厚子　　永田　智子

１．研究主題

「指導と評価の一体化を目指した授業の工夫」

～自分自身を振り返り主体的に学習する態度を養う～

２．学校及び生徒の実態

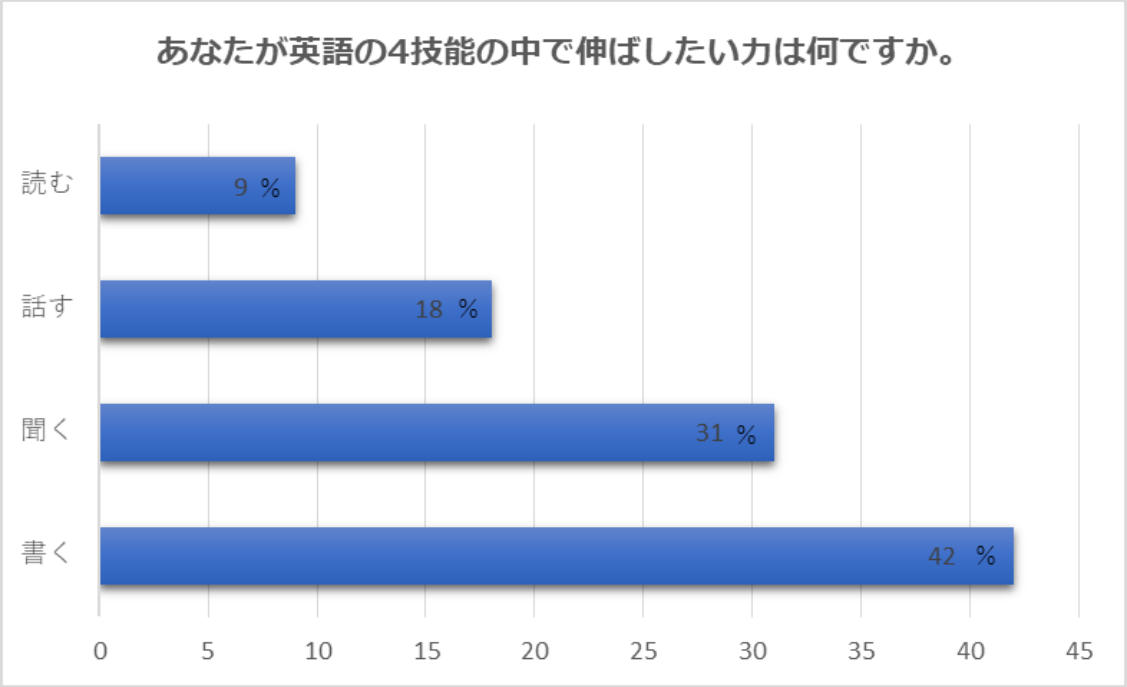
本校は，富里市役所近隣に位置し，今年度創立７４年を迎える。近年富里には新しい住宅が増加し，学級も増加する傾向にある。

今年度は１年生７クラス，２年生７クラス，３年生６クラス，特別支援学級２クラスがあり，全校生徒６８６名の大規模校である。学区内には，富里小学校，七栄小学校，富里第一小学校，根木名小学校があり，小中連携（ジョイントスクール）の教育に力を入れている。

本校の生徒は年々落ち着いた生活態度になってきており，部活動にも積極的に取り組んでいる。一方で県標準学力テストでは，全ての領域で県平均を下回っているため，学力が高いとは言えない。授業規律が確立されているからこそ，次のステップとして学力の向上を目指している。学力向上を目指し，富里中独自の取り組みとして，学習委員会が定期テスト前に「Ｚ（ぜったい）Ｔ（テストに）Ｄ（出る）」「Ｔ（テストに）Ｄ（出る）Ｋ（かも）」という，いわゆる予想問題を学年フロアの廊下に掲示し，学習意欲向上に繋げている。また，毎週木曜日の朝読書時に「アドバンステスト」という既習の基礎基本を中心とした小テストを学校全体で実施している。

富里中学校では，ALT が１名おり，週に１度各クラスに入り英語の授業が行われている。また富里市の英語教育の一環として，小中学校で「英会話の日」という行事を年間で３度実施し，主にコミュニケーションを中心とした活動に取り組み，英語に親しもうとする態度を養っている。

４月に，生徒たちが英語教育をどのように考えているかを知り，今後に役立てるため，アンケートを実施した。



３．主題設定の理由

本校の研究主題は「基礎基本の定着と知識を活かした学習の深まり～ICT の充実を目指して～」である。また，今年度の英語科の努力点は「定型表現を習得するための ICT の活用」とした。

上記の通り，ICT の活用を意識した活動を取り入れようと各教科試行錯誤しているところだが，年度当初の段階では，環境がまだきちんと整っておらず，足踏み状態であった。7 月頃から徐々に環境が整備され，英語科としての取り組みの１つに「学びポケット」というツールを利用し，教科書やワークブックの QR コードを読み取り，復習に充てることができている。（動画①）より幅広く利用できるよう，これからも模索していきたい。

本校生徒のアンケートからもわかる通り，もっとも伸ばしたいと考えている力については「書くこと」であった。小学校の英語教育の進歩により，「聞くこと」と「話すこと」に対する抵抗感が数年前よりもなくなり，その２つをメインとした授業には自信をもって取り組んでいる様子が伺える。一方で，小学校ではあまり中心として学習してこなかった「書くこと」と「読むこと」に関して，特に中学校１年生では抵抗感が強く，「英語が苦手」と感じてしまう要因になっている。２つのうち本校生徒は特に「書くこと」について苦手意識が強く，筆記のテストになると点数を向上させることに苦労している。中学生は定期テストや高校受験もあるため，「書くこと」を避けては通れないため，以前から課題としていた。

「書くことの力を伸ばすためにどうしたらいいか」という質問に対しては「B ノートをやる」，「単語を覚える」といった程度の考えしかなく，教員が考え伸ばさせていかなければならないと感じた。（本校における「B ノート」とは，小テストに向けて自主学習を行ったり，テストの直しをしたりするノートであり，主に授業外で練習するためのノートのこと）そこで考えたのが，様々な活動に対して「具体的に振り返る」ことに重点を置いていくことであった。

学習指導要領の改訂（平成 29 年，平成 30 年）にあたり，学習評価については，資質・能力の三つの柱に基づいた目標や内容の再整理を踏まえ，「関心・意欲・態度」，「思考・判断・表現」，「技能」，「知識」（外国語科は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」，「外国語表現の能力」，「外国語理解の能力」，「言語や文化についての知識・理解」）の４つの観点から，「知識・技能」，「思考・判断・表現」，「主体的に学習に取り組む態度」の３つの観点に整理された。

中学校では，今年度から新学習指導要領が全面実施となり，新たな観点で評価することに苦労した学校も多いことだろう。特に，教科「外国語」においては，「聞くこと」，「読むこと」，「話すこと（やり取り）」，「話すこと（発表）」，「書くこと」の５つの領域が「内容のまとまり」とされており，新学習指導要領では「内容のまとまり（領域）」ごとの目標が示されていることから，５つの領域を３つの観点でどのように評価するか，各校検討を重ねたことだと思う。

以前まで本校では，「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の観点に対して授業中の発表や授業態度を参考にすることはもちろんのこと，スピーキングテスト等も実施しながら評価してきた。A ノートや B ノート，ワークブックといった課題を提出することも評価の対象の一部としてきた。

今回は，各校において新学習指導要領の実施に向けた取り組みを検討する際の参考となるよう，「主体的に学習に取り組む態度」に対する評価の在り方を見つめた，本校の取り組みを提案したい。

４．研究仮説

仮説１　小テストや単元テスト，定期テストの成果と課題を振り返らせることで，主体的に取り組む態度が養われ，自らの課題解決に繋がるだろう。

５．研究の内容と実践

仮説１より（３学年の取り組み）

(1)　小テスト

①ワークから出題する小テスト（資料Ⅰ）

３学年は１学年の時から帯活動の一環で小テストに取り組んでいる。ワークブックの一部を抜粋し，５問程度既習のものを振り返るといった活動。表は１回目と同じ問題，裏は初見の問題。表裏どちらを選んでもよい。

②動詞の活用，形容詞・副詞の変化小テスト　（資料Ⅱ）

口頭で原形を伝え，意味と過去形，過去分詞形を自分で書く１０問程度のテスト。動詞だけでなく，形容詞や副詞の変化（比較級，最上級）も同じように行っている。その単語を文章の穴埋めにして，実際に使いこなせているかを確認している。

→その都度振り返りをさせて，次回へのモチベーションアップに繋げている。【主体的】（資料Ⅲ）

(2)　単元テスト　（資料Ⅳ）

単元が終了する度に実施している。教科書の本文の中でもキーセンテンスや既習の文法事項，受験によく出題される熟語・連語に焦点を当てた文章の穴埋め問題が１０問，各パートの本文に関わる並べ替え問題，指示語の問題，正誤問題等が１０問，すでに行った小テストから５問の計２５問を２０分間で解く。Ａノート（授業ノートを見ながら解いてもよい）

→その都度振り返りをさせて，次回へのモチベーションアップに繋げている。【主体的】（資料Ⅴ）

(3)　グラマーシート　（資料Ⅵ）

新出文法の説明，例題に挑戦する。英作文でオリジナルの文を作成させている。早く終わった生徒は教員の所へ持って行き，音読をさせる。粘り強さや積極性を狙いとしている。曜日と日付を毎回書かせている。

→表現力の向上がメインではあるが，粘り強さや積極性という観点で主体的に繋げている。

(4)　スピーキングチャレンジ　（動画②）

グラマーシートで学習したら，教科書の tool kit のキーセンテンスを繰り返し練習する。教員がピクチャーカードを見せ，生徒はその絵に合う英文を流暢に言えるようにする。思考・判断・表現の観点は定期テストだけでなく，スピーキングチャレンジも評価資料とする。

→教員が評価をする。【思考・判断・表現】

→振り返りをさせて，次回へのモチベーションアップに繋げている。【主体的】（資料Ⅷ）

(5)　定期テストの振り返り

　定期テストが返却されたら，観点別に点数を確認し，テストを振り返る。また，テストの結果だけでなく，その他活動してきたものの自己評価や今後の自分の課題を記入する箇所もあり，総合的に振り返っている。

→振り返りをさせて，次回へのモチベーションアップに繋げている。【主体的】（資料Ⅸ）

６．研究の成果（○）と課題（▲）

(1)　小テスト

○１つのパートにつき２回行うが，２回目は１回目の問題から同じ問題が出題されるため，間違ったところを B ノートで練習している生徒が増えた。１回目よりも２回目の方の成績が上がる生徒が多かった。さらに，２回目は裏の問題に取り組む生徒が増えたり，どちらも取り組んだりしている生徒もいた。

→間違ったところを B ノートで練習している生徒の増加【主体的に学習する態度】の向上

▲今後，初見での問題もできるようになってもらいたい。また熟語編のような受験対策問題を作っていきたいと考えている。

(2)　単元テスト

○A ノートを見ながら解いても良いとしているため，自分でも振り返られるように工夫してノートを取ろうとする姿が見られた。英語を苦手とする生徒もただノートを写すだけでなく，どこが大切かを考えようとしており，授業に取り組む態度に変化があった。

→A ノートを工夫してまとめようとする姿勢【主体的に学習する態度】の向上

▲３回目からは A ノートを工夫して写すだけでは解くことのできない，考えなければならない問題も出題しており，応用力を求めている。

(3)　グラマーシート

○文法構造を理解するだけでなく，英作文を作るときに分からない表現があったら，積極的に質問しようとする態度が見られた。

→積極的に質問しようとする態度【主体的に学習する態度】の向上

(4)　スピーキングチャレンジ

○最初は途切れ途切れだったが，現在はキーセンテンスをすらすら言えるようになった。中にはそこで学んだ表現を日常生活の中で使用している生徒もいた。

→学んだ表現を日常生活の中で使用している生徒がいた【主体的に学習する態度】の向上

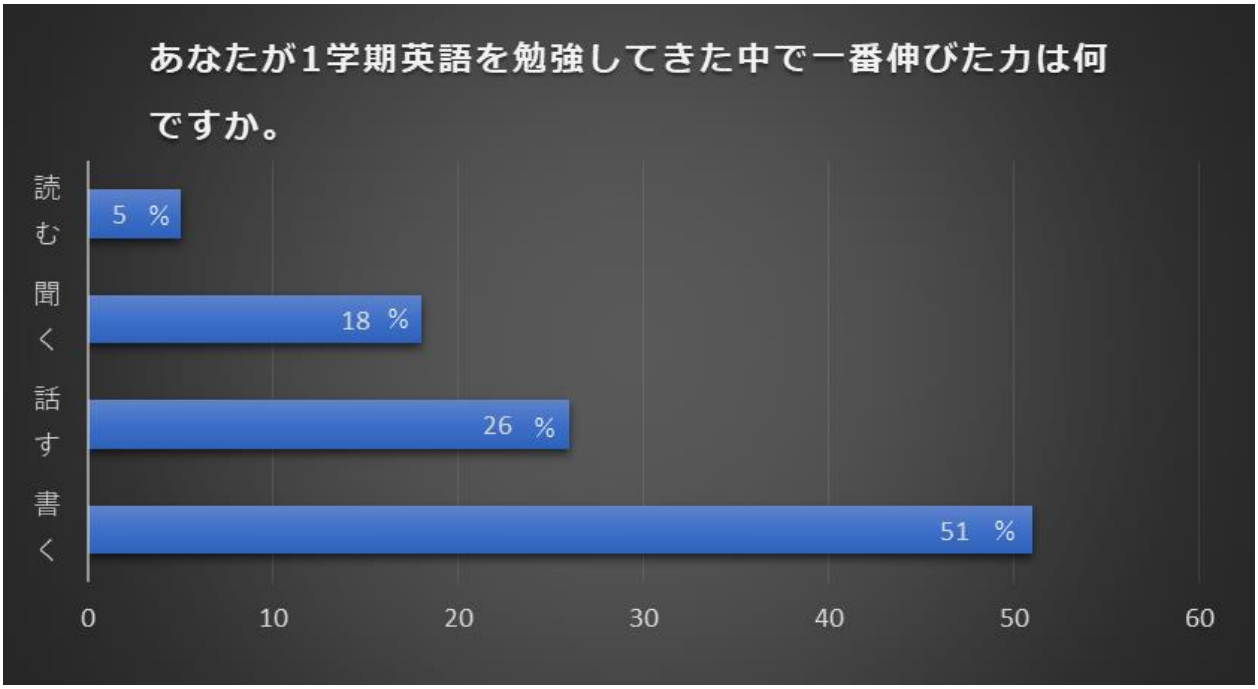
▲この活動は，「思考・判断・表現」の観点に重きを置いてしまい，「主体的に学習に取り組む態度」の観点での評価は後回しになってしまった。

▲定期テストで書かせる問題を出題したが，正答率は低かった。したがって，今後はスピーキングチャレンジの後に，そのキーセンテンスを使用した並び替えや空所補充の確認テストを行っていきたい。

７．全体的な研究の成果と課題

「主体的に学習する態度」は身についたが，実際に知識の構築に繋がったかというと疑問が残る。そして３学年は受験を控えているため，初見の問題に対応する力を身につけさせなければならない。今まで取り組んできた活動を継続するとともに，更なる教材研究が必要である。

２学年も小テスト，単元テストを行っているが，１学年は内容的にも範囲が狭いので行えていない。２学期以降，学習内容が深まってきたら同様に取り組んでいく予定だ。学校全体として取り組んでいけばそれが習慣化し，「主体的に学習する態度」の向上はもちろんのこと，学力の向上も期待できる。

以下は１学期終了時に実施したアンケートである。４月に実施したアンケートと比較すると，課題として挙がっていた「書くこと」の力が身についたと実感できた生徒が多かった。しかしながらこの結果はあくまで振り返りを書くことの力が伸び，「主体的に学習する態度」が養われたということに過ぎず，英作文のような英語の Writing 力が向上したとは言い切れない。

以上のことも含め，富里中学校としては「主体的に学習する態度」を今後も養っていくよう努力するとともに，英語力の向上，学力の向上を目指し，日々研修を積んでいきたい。